

教材活用例(6) 「日本一の琴づくり

～こだわりの伝統工芸士 藤田房彦～

〔小学校高学年 主題：あきらめない強さ 内容項目：1の(2)〕



(1) 開発資料の実際

ア 素材の説明

(ア) 素材の概要

〈素材—^{ふじたふさひこ}藤田房彦さん—について〉



藤田房彦さんは、福山市の琴づくり職人である。中学校の担任の勧めで琴工場に就職し、琴づくりの道に進む。

自分の納得する琴をつくろうと、日本では初めての一人だけでの琴づくりを始める。そのこだわりの音色の美しさを認められ、福山の琴職人として初の伝統工芸士に認定される。

昭和18年 (1943年)	備前にて生まれる。
昭和33年	中学卒業後、地元の琴工場に就職する。
昭和39年	岡山の工場で働く。
昭和42年	福山へ戻る。
昭和45年	独立を決意。一人での琴づくりを始める。
平成 5年	伝統工芸士に認定される。
平成 8年	伝統工芸品産業功労賞受賞。

藤田房彦さんの経歴

(イ) 4コマ絵

実際の出来事やインタビューを基とし、藤田さんの考え方や生き方が表れ、琴づくりにこだわる葛藤場面を中心場面とし、起承転結を設定した。

	起	承	転	結
場面のイメージ絵				
絵の説明	中学校の担任の先生の勧めで琴づくりを始めた藤田さん。しかし、最初の仕事は直接琴づくりとは関係のない仕事ばかりだった。	藤田さんは、やっと琴づくりの仕事ができるようになった。しかし、なかなかうまく台がけずれず、どうしても先輩に仕上げを依頼されてしまう。その様子をこぶしをにぎってじっと見ていた藤田さんは、前よりいっそう仕事に取り組んでいった。	一人で琴づくりを始めた藤田さん。納得の音色が出る琴を目指していたが、ある日客に琴を返品されてしまう。それをじっと見ていた藤田さんは、前よりいっそう琴づくりにぼっとうする。	藤田さんは伝統工芸士に認定された後、知り合いと話をしながら自分のごつごつした手を見つめ、今までの努力や琴づくりへの誇りをしみじみと感じている。

イ 資料の解説

【作成の要点】

高学年のこの時期は、それぞれに高い理想を追い求める時期だといわれる。ある人物の生き方にあこがれたり、自分の夢や希望がふくらんだりする。しかし同時に、自信がもてなかったり、夢と現実との違いを意識したりする時期でもある。このような時期だからこそ、様々な生き方への関心を高めるとともに、計画的に努力目標を立て、くじけずに希望と勇気をもって取り組み、その理想に向かって着実に前進していこうとする強い意志と実行力を育てる必要がある。そうした児童の発達の段階を踏まえ、本資料を構想していった。

この資料の主人公の藤田房彦さんは、琴職人として初めて伝統工芸士に認定された方である。また、琴職人としては珍しく、全工程を一人で行い、こだわりの音色を追求し続けている。藤田さんの、長年にわたって自分のこだわりを持ち続けながら一つのことを続けていく姿から、1－(2)希望・努力の道徳的価値について考えられると思い、ねらいを設定した。

本資料では、藤田さんが中学校卒業の時、担任の先生の勧めで琴工場に就職し、自分が決めたことではないけれども一生懸命取り組む場面を設定した。その藤田さんの姿は、児童にとって不思議とを感じる面もあるが、動機が何であれ、琴づくりという自分の目標を定め、懸命に取り組む時の藤田さんの思いについて、自分と比較させながら考えさせていけると考えた。その後、先輩にやり直しをされ、「こぶしをにぎってじっと見ていた」という場面や、客に琴を返品され、「それからますます藤田さんはひたすら琴づくりにぼっとうしました」という場面を設定することで、困難があっても自分が納得できる琴を作り続けようとする思いを考えさせられるようにした。また後半には、伝統工芸士に認定された後、長年の作業で厚みをおびた、たくましい自分の手をしばらく見つめている場面を設定し、努力が成就した満足感と、さらに努力を続けていく思いを考えさせていけるようにした。

高学年では、学年初めや卒業時など、希望や目標をもって努力する姿を育てたい場面が多い。他の学習や行事等と関連を図りながら本資料を扱うと、より児童の意識が高められると考える。



【心に響くちょっといいなし】

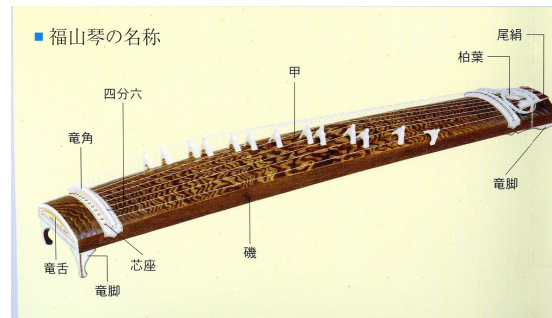
藤田さんが一人で琴づくりを始めて間もなく、妻が大病を患った。治療費や琴の作成の出費のため、生活はどん底状態になった。藤田さんは当時、「これ以上の底はない。」と自分の状態を思ったほどである。

しかしそんな時、藤田さんの腕をみこんだ業者が、今なら数千万円もする琴の材料を貸してくれた。それに助けられ、懸命に琴づくりをしていくうち、藤田さんの琴は評判になるほどになった。

藤田さんの現在があるのは、自分自身の努力もさることながらそうした周りの善意に支えられた結果であると言えるのではないだろうか。

ウ 資料全文

日本一の琴づくり ～こだわりの伝統工芸士 藤田房彦^{ふさひこ}～



藤田さんが琴の道に進んだきっかけは中学校卒業後の十五才の時でした。担任の先生のすすめで地元の琴工場に就職したのです。それが、藤田さんにとっては琴との初めての出会いでした。

約三年、その琴工場に住み込みをして働きました。最初の仕事はお茶くみとそうじ。毎日、毎日、みんなにお茶を入れたり工場のそうじをしたりと、琴づくりと直接関係のない仕事ばかりをしていました。それでも、正月とぼん以外は休みをとることもなく一生懸命働きました。

二年目になって、藤田さんはやっと琴づくりの仕事がもらえました。「くり」という、琴の台のうらをかんな⁽¹⁾でけずる仕事です。最初のうちは、藤田さんがけずった台はきれいいにはけずれず、仕上げを先輩の職人がしました。なんとか自分で仕上げられるようになると、時間をかけてけずりました。しかしそれでも先輩は藤田さんの台に仕上げを入れるのでした。藤田さんはそれを、こぶしをにぎってじっと見ていました。

それから藤田さんは、前よりいっそう一生懸命に「くり」の仕事に取り組みました。朝からばんまで一日も休むことなく、五年間も台と向き合いました。そしてとうとう一人で「くり」を仕上げられるまでになりました。そんな時、藤田さんの仕事ぶりが認められ、岡山県の工場から仕事に来てほしいとさそわれました。藤田さんは、その岡山の工場で、台だけでなく、焼き⁽²⁾や飾り付け⁽³⁾、げん張り⁽⁴⁾など様々な仕事をするようになりました。

二十七才になり、すべての工程の技を身につけると、藤田さんの心に、一つの強い思いがわいてきました。

「自分一人で琴をつくりたい。」

藤田さんは、自分が思う美しい音色にこだわりたい、と思ったからです。それぞれの工程が高度であるため、今までだれも挑戦しなかった一人での琴づくり。藤田さんは福山へ戻り、自分の工場を建て一人で琴づくりをはじめました。

しかし、その琴づくりは、すべての工程を自分でしなければならないため、とても忙しかったのです。日曜日や祭日も休むことなく、毎日朝七時から夜十時ごろまで黙々と働き続けました。

「よい琴は、昔から鈴の音がすると言われている。そんな音色が出せたら。」

藤田さんはそんな思いをもちながら、台はどんな木材にすればよいか、いろいろと試しました。納得する美しい音色を探そうと、国内の桐⁽⁵⁾や杉、外国の木材など、様々な木材を使って琴をつくり、音を試していきました。また現地まで直接足を運び、自分の目で質や木目を確かめました。

普通福山琴は、他の琴と違って桐しか使わないためよい音色が出ると評判でしたが、藤田さんの中でも会津桐⁽⁶⁾が一番よい音色が出ることに気がきました。

「よし。自分の納得する音を出すためには、台は会津桐がいい。値段は高いが、すばらしい音色になる。」

会津桐の値段は、ほかの木材と比べてもとても高いのですが、どんなにお金が苦しい時でも会津桐にこだわり、遠くまで自分の目で選びに行くほどでした。

ある時、お客さんから「この琴は求めている音が出ない。」と返品されたことがありました。藤田さんはその日、返品された琴をじっと見つめていました。

それからますます藤田さんはひたすら琴づくりにぼとうしました。藤田さんは、一ミリ単位の微妙な作業「げん張り」で、げんを張っては音を聴き、またげんを張っては音を聴きという作業を何度も何度も繰り返しました。体を心配した奥さんが仕事の時間を減らすよう頼んでも、「心配ない。わしは作り続けるんじや。」

と手を休めることはありませんでした。自分が思う美しい音色が出せる琴にこだわり続けるうち、藤田さんの作る琴の数は通常の人のご二倍の量ほどにもなりました。そして、いつの間にか、琴の良しあしを手の感覚だけで判断できるほどのうで前になったのです。



「藤田さんの琴の音色は違う。」

そう言って、遠方から注文に訪れるお客が増えてきました。

藤田さんの奥さんは時々工場をのぞきながら、

「お父さんは本当に琴づくりが好きじゃねえ。」

とつぶやいていました。

藤田さんが五十二才になったとき、琴職人としては日本で初めて伝統工芸士⁽⁷⁾に任命されました。その知らせを聞いた時、藤田さんの胸に熱いものがこみあげてきました。

その数日後、藤田さんを昔からの知り合いが訪ねてきました。話をしている時、その人はふと藤田さんの手を見て言いました。

「藤田さん、わしはあんたのごつごつした手が好きじゃ。あんたの手は職人の手じゃ。その手にわしはほれとるんじや。」

藤田さんは、自分の手に目をやりました。自分のごつごつした手。それは長年の作業で厚みをおびた、たくましい手でした。

「納得いくものは、いつまでもたってもできんけどなあ。」

そう言ってほほ笑みながら、藤田さんはしばらく自分の手を見つめていました。



「なんでも一つのことをやり続けていくのはいいことじゃ。」

現在六十七才になった藤田さんは、おだやかな笑顔で語ります。

そして今でも美しい音色を目指し、こだわりの琴づくりを続けています。

【注】

- (1) 材木の表面を削ってなめらかにする木工道具。
- (2) 琴づくりの製造工程の一つで、灼熱に焼いたこてで表面を焼いていくこと。
- (3) 琴づくりの製造工程の一つ。四分六・竜角・柏葉などの装飾部品や象嵌・蒔絵・寄木等の伝統的装飾技法を用いる。
- (4) 琴づくりの製造工程の一つ。げんの張り加減で琴の音色が変わる。
- (5) 日本国内でとれる木材としては最も軽く、湿気を通さず、割れや狂いが少ないという特徴がある。
- (6) 特徴として、材質が緻密で、適度な硬さと光沢があり、かんなをかけると木肌が銀白色の輝きを放つ。
- (7) (財)伝統的工芸品産業振興協会が、経済産業大臣指定の伝統的工芸品の製造に従事している技術者のなかから、高度の技術・技法を保持する人を「伝統工芸士」として認定している。

エ 授業展開例 ー学習指導案（略案）ー

「ぼっとうした」というキーワードに着目し、
藤田さんのあきらめない強い意志について考える展開A
～ 書く活動を生かした指導 ～

(ア) 主題名 あきらめない強さ 1ー(2)

(イ) ねらい 琴づくりにぼっとうした藤田さんの気持ちを考えさせることを通して、あきらめずに取り組むことの意義について考えを深め、一つのことに理想をもって粘り強くやり遂げようとする心情を養う。

(ウ) 資料名 「日本一の琴づくり ～こだわりの伝統工芸士 藤田房彦～」

(エ) 学習指導過程

	学 習 活 動	主な発問と児童の心の動き	留 意 点 (☆評価の観点)
導 入	1 福山琴について話し合う。	○ 福山琴を知っていますか。 ・聞いたことはある。 ・福山の名前が付いている琴があるんだな。	○ 福山琴について話し合い、資料への興味づけをする。
展 開	2 「日本一の琴づくり～こだわりの伝統工芸士～藤田房彦～」を聞いて話し合う。	○ 琴づくりと関係のない仕事であっても、藤田さんはどんな気持ちで一生懸命働いたのでしょうか。 ・やりたくて始めた仕事じゃないからやめてしまいたい。 ・つらいことばかりでいやになる。 ・早く琴づくりの仕事をさせてもらえるようになりたい。 ○ 時間をかけてけずった台を先輩に仕上げを入れられてこぶしをにぎってじっと見ていた時、藤田さんはどんな気持ちになったでしょう。 ・あんなにいっしょうけんめい作ったのにくやしい。 ・どんなにがんばってもだめなのかな。 ・早く先輩に直されないような台を作れるようになりたい。 ・もっと努力して腕をみがきたい。 ◎ 藤田さんは、どんなことを考えながら琴作りにぼっとうしていたのでしょうか。 ・自分が納得するよい音が出る琴が作れるようになりたい。 ・しんどくてもよい琴ができるまであきらめないぞ。 ・きっとよい琴をいつか作れるようになる。 ○ しばらく自分の手を見つめながら、藤田さんはどんなことを考えていたでしょう。 ・今までがんばって続けてきてよかった。 ・あきらめずがんばればすごいことができる。 ・よい琴をつくりたいという目標を作って努力してきてよかった。	○ 先生に勧められて始めた琴づくりの仕事であることや琴づくりをさせてもらえないしんどい気持ちなどをおさえる。 ○ 自分の力不足によるくやしさをもっと腕を磨きたいという意欲をつかませる。 ○ ワークシートを活用し、じっくりと藤田さんの気持ちを考えさせる。 ☆ 書く活動を通して、琴づくりにぼっとうした藤田さんの気持ちを自分なりにとらえ、自ら考えを深めることができたか。
	3 自分の生活を振り返る。	○ 自分で決めて、一生懸命がんばっていることに、どんなことがありますか。	
終 末	4 藤田さんの作った福山琴の音色を聴く。	○ 藤田さんの作った福山琴の音色を聴きましょう。	○ 藤田さんの娘が演奏している様子を見せ、藤田さんのすばらしさを再度感じさせるようにする。 ○ ワークシートに感想を書かせ、価値をあたためさせる。

「こだわり」というキーワードに着目し、

藤田さんの強い意志について考える展開B

～ 対話活動を生かした指導 ～

(ア) 主題名 あきらめない強さ 1－(2)

(イ) ねらい 美しい音色にこだわり続けた藤田さんの気持ちを考えさせることを通して、あきらめずに取り組むことの意義について考えを深め、一つのことに理想をもって粘り強くやり遂げようとする心情を養う。

(ウ) 資料名 「日本一の琴づくり ～こだわりの伝統工芸士 藤田房彦～」

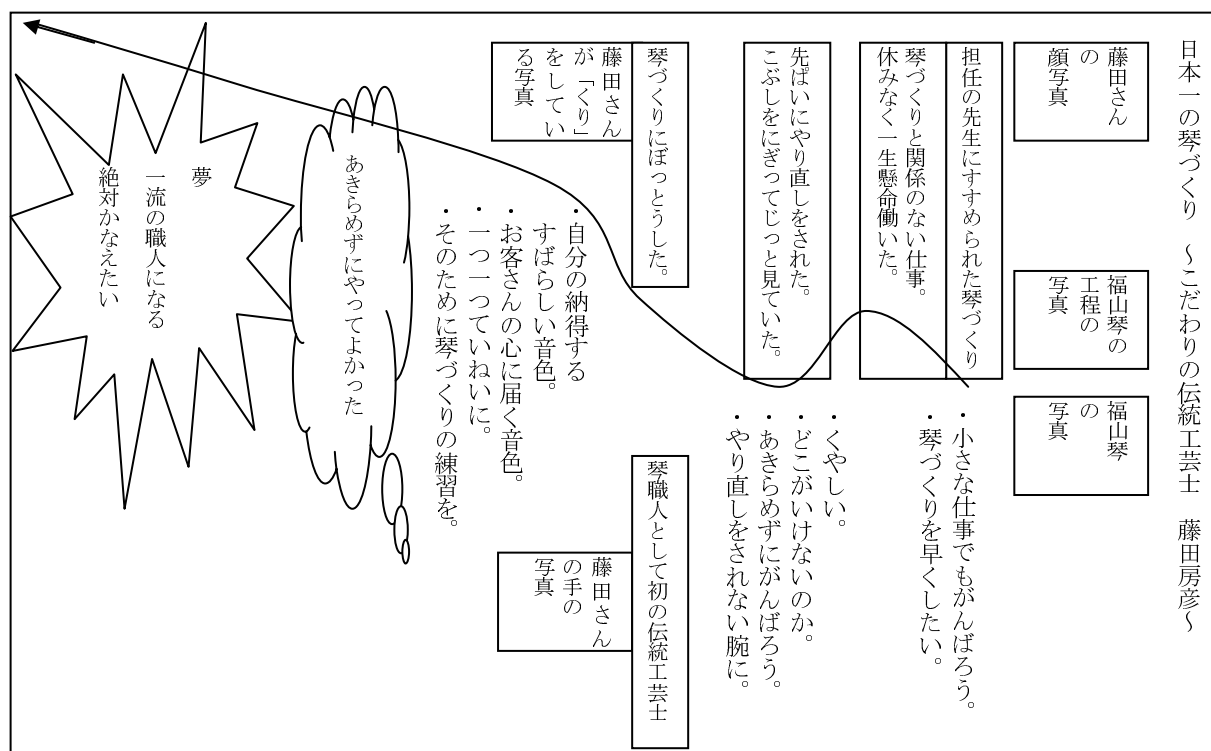
(エ) 学習指導過程

	学 習 活 動	主な発問と児童の心の動き	留 意 点 (☆評価の観点)
導 入	1 「こだわり」について話し合う。	○ 「こだわり」と聞いてどんなことを思い浮かべますか。	○ 辞書で言葉を調べさせたり、想像したりしてイメージをふくらませる。
展 開	2 「日本一の琴づくり～こだわりの伝統工芸士～藤田房彦～」を聞いて話し合う。	○ 琴づくりと関係のない仕事であっても、藤田さんはどんな気持ちで一生懸命働いたのでしょうか。 ・ やりたくて始めた仕事じゃないからやめてしまいたい。 ・ つらいことばかりでいやになる。 ・ 早く琴づくりの仕事をさせてもらえるようになりたい。 ○ 時間をかけてけずった台を先輩に仕上げを入れてこぼしをにぎってじっと見ていた時、藤田さんはどんな気持ちになったでしょう。 ・ あんなにいっしょうけんめい作ったのにくやしい。 ・ どんなにがんばってもだめなのかな。 ・ 早く先輩に直されないような台を作れるようになりたい。 ・ もっと努力して腕をみがきたい。 ◎ 藤田さんは、どんなことを考えながら美しい音色にこだわり続けたのでしょうか。 ・ 自分が納得するよい音が出る琴が作れるようになりたい。 ・ しんどくても日本一の琴が作れる腕になりたい。 ・ もっともっとよい琴を作るまであきらめないぞ。 ○ しばらく自分の手を見つめながら、藤田さんはどんなことを考えていたでしょう。 ・ 今までがんばって続けてきてよかった。 ・ あきらめずがんばればすごいことができる。 ・ よい琴をつくりたいという目標を作って努力してきてよかった。	○ 先生に勧められて始めた琴づくりの仕事であることや琴づくりをさせてもらえないしんどい気持ちなどをおさえる。 ○ 自分の力不足によるくやしさをもっと腕を磨きたいという意欲をつかませる。 ○ ペアトークで考えを交流させ、全体に出させる。 ○ グループトークで藤田さんの気持ちを考えさせたあと、全体に出させる。 ☆ グループによる話し合いを通して、藤田さんのこだわり続けた思いについて自分の考えを見直し、練り直すことができたか。 ○ 補助発問で、しんどくなったことはないか、など藤田さんの弱い部分を問うてゆさぶりをかける。
	3 自分の生活を振り返る。	○ 自分で決めて、一生懸命がんばっていることに、どんなことがありますか	
終 末	4 藤田さんの作った福山琴の音色を聴く。	○ 藤田さんの作った福山琴の音色を聴きましょう。	○ 藤田さんの娘が演奏している様子を見せ、藤田さんのすばらしさを再度感じさせるようにする。

(才) 資料分析表

資料場面	登場人物の行為・心情		主人公の心情 (藤田さん)	児童の意識の流れ
	中心人物(藤田さん)	その他の人物		
○藤田さんの紹介 ○中学の担任の先生の勧めで琴工場に勤める。	・福山琴の職人として初の伝統工芸士と伝統工芸品産業功労賞を受賞。 ・中学の担任の先生の勧めにより十五才で地元の琴工場に勤める。初めは琴づくりと関係のない仕事ばかり。		・琴づくりと関係がない仕事はいやだ。 ・早く琴づくりの仕事をしたい。 ・琴とは関係ない仕事でもいっしょうけんめいしよう。	・すごいな。 ・自分たちの近くにそんなすごい人がいたんだ。 ・決められた仕事なんてやる気がでないな。 ・琴づくりの仕事を早くしたい。 ・他の人たちが困らないように自分の仕事を一生懸命しよう。 ・いつか先輩たちのように立派な琴の職人になりたい。そんな夢をもつてやっている。
○二年目になって琴づくりができる。うまくいかず先輩にやり直しを入れられる。 ○前よりいっそう「くり」の仕事に取り組む。	・二年目になってやっと琴づくりの仕事がもらえる。『くり』の仕事だがうまくいかずがんばって先輩には仕掛けをさせてもらう。それを三回をにぎってじっと見ていた。 ・前よりいっそう「くり」の仕事に取り組む。どうとう一人や「くり」ができるようになる。それからますます腕を上げ、一人で琴づくりすることを決意する。		・一生懸命「くり」をしたのにうまくできないのか。 ・先輩には仕掛けをされるなんて恥ずかしい。 ・自分一人では仕掛けられるような腕前になりたい。	・くやし。どうしてがんばったのに仕掛けをされるんだ。 ・自分の仕事のことばかりじゃないのか。 ・忙しい先輩にも申し訳ない。 ・早く仕掛けをされなくていいような腕前になりたい。 ・だれからも文句を言われないような技術を身につけたい。
○一人で琴づくりを始めようをめたくて努力する。 ○琴が返品された後、ますます琴づくりにはげようとする。	・すべての工程を一人でするため忙しかつた。自分の目指す音色を出せる琴を作るため材料にこだわりの、金津桐にこだわった。 ・ある日、客からこの音色は違う。この琴が返品された。それをじっとみていた。それからますます琴づくりにはげようとした。藤田さんは人の二倍ほどの量の琴を作るほどだった。そして琴のよいめしを手の感覚だけで判断できるほどの腕前になった。	○藤田さんの体を心配するように頼む。	・くやし。 ・どうしてお客に納得してもらえない琴がでるんだ。 ・自分の今の音色ではだめなのか。 ・絶対にお客に納得してもらえない琴をつくりたい。	・自分一人で作るんだから自分が一番いいと思えるものを作ろう。 ・絶対にすばらしい琴をつくるんだ。
○伝統工芸士に認定され、長年の夢んできた現を思いながら自分の手を見つめる。 ○現在も「だれ」の琴づくりを続けている。	・藤田さんが五十二才の時、琴職人として初の伝統工芸士に認定される。 ・知り合いが訪ねてきて藤田さんの「こころ」した手が好きだ、と言われている。藤田さんはしばらく自分の手を見つめている。 ・六十七才になった藤田さんは「なんでも一つのことをやり続けていくのはいいことじゃ。」と語り、今でも「だれ」の琴づくりを続けている。	○藤田さんの工場をのぞきながら「お父さんは本当に琴づくりが好きじゃねえ。」とつぶやく。	・今までがんばってやってきましたよ。 ・苦労してきた申請が承認された。 ・どんなことでも一つのことを一生懸命やっていたらいつか認められる。 ・これから自分も納得する琴づくりをしていこう。	・自分の夢のことがいけなかった。 ・今のままではいけないのか。 ・どこまでいけばいいんだ。 ・一生懸命つくっているのにくやし。もつともつという音色の琴をつくりたい。 ・あの夢がなごうでできるような、琴をつくりたい。 ・今までががんばってきたよかった。 ・自分たちががんばったことが認められてうれしい。 ・自分の夢がいられた認められたのがうれしい。 ・努力しなかったら今の自分はなかった。 ・これからもう一ついい琴を作っていくぞ。

(力) 板書例



【板書の構成】

心情曲線を活用し、藤田さんの琴づくりを始めてから現在までの気持ちを心情曲線で表すことにより、心の揺れや決意を視覚的に分かりやすくできると考えられる。また、藤田さんの気持ちやその時の状況が分かる短冊を、必要最小限の言葉に厳選して提示する。キーワード短冊の活用により、児童の思考の手がかりにする。さらに、写真の活用により、藤田さんの顔や仕事の様子、琴の写真などを提示し、児童にイメージをとらえさせ考えやすくする。

(2) 活用のポイント

ただひたすら美しい音色を求めて琴づくりに励んだ藤田さんの生き方を通して、どんなきっかけであっても、目の前のことにひたすら努力を続けることや、様々な苦労や困難を乗り越え、理想に向かって進もうとする強い意志や実行力をもつことのすばらしさをとらえさせたい。そのために、心が揺れ動く場面を発問し、乗り越えるために必要な思いは何なのかを考えさせていく。また、「ぼっとうする」や「こだわり」という、藤田さんの思いを考えられるようなキーワードが表れている場面に書く活動を取り入れてじっくりと考えさせ、高い理想をもって着実に前進しようという強い意志と実行力について考えを深めさせる。

児童の中には、福山琴だけでなく琴にもなじみの薄い児童がいると考えられるので、まず琴について理解させる必要がある。方法としては、実物の琴や写真を提示したり、琴づくりの工程を図などで提示したりすることが考えられる。

また、終末や導入で、琴の演奏を聴くことにより本時にねらう道徳的価値をあたためられると考える。藤田さんの娘が琴奏者なので、娘の演奏の映像であればさらにインパクトが与えられるであろう。

ア 発問の工夫

発問は、藤田さんの心の揺れや変化を追いながら展開する。中心発問は「ぼっとうする」というキーワードに着目させ、考えを深めさせていく。

イ 書く活動の工夫

中心発問でワークシートに書く活動を取り入れる。児童にじっくり考えさせるとともに、教師の見取りにも生かす。

ウ 琴の写真や琴づくりの工程の図の提示

著作権等に留意しつつ、福山琴の写真と琴づくりの工程の図をインターネット等から収集し、拡大して提示する。

エ 視聴覚教材の活用

終末で琴の演奏のビデオを見せる。特に、今回は藤田さんの娘（琴奏者）の映像を使用する。

(3) 授業の実際

ア 発問の工夫

前段では、琴づくりを始めたばかりの時の気持ちと、琴づくりを始めてしばらくした時の気持ちを考えさせた。児童からは、琴づくりとは関係のない仕事でも一生懸命働いたのは、早く琴づくりをさせてもらえるようになりたい、という思いと、好きで始めた仕事ではないのでつまらない、という前向きな気持ちと後向きな気持ちの両面の反応が出た。

基本発問の2つ目では、時間をかけてけずった台を先輩に仕上げをいれられたときの気持ちを問うと、くやしいという気持ちから、もっとがんばって上手になりたいという向上心や、もう日本一の琴職人になるという夢はかなわないのかという挫折感に関する反応が出た。また、先輩の職人にいつも仕上げをしてもらって悪いから、早く上手になって先輩に迷惑をかけないようにしたい、という反応もあった。

中心発問では、客に返品された琴をじっと見つめていた後に、琴づくりにぼっとうする藤田さんの気持ちを問うた。児童は、あきらめない、今やめたら自分の夢がかなわなくなる、こぶしをにぎったあの時にもどりたくない、と、板書の心情曲線を見ながらの反応が出てきた。高い目標を立て、進むという意識の流れをつかんでいた。

後段では、ごつごつした自分の手をしばらく見つめていた藤田さんの思いを問うことで、長年ひたすらに努力してきた自分の歩みのすばらしさや達成感をしみじみと振り返る気持ちに共感させることができた。

《児童の感想文》

- やっぱ最初であきらめず、何度も何度も繰り返していけば最後にはできるということが分かりました。一番大事だと思ったのは、夢をあきらめないことです。
- 藤田さんは、何事にも負けずにコツコツ、あきらめず強い心をもって琴づくりをやっているから、私も習っていることをがんばってみたいです。
- ぼくは藤田さんはとてもいい夢をもったと思います。ぼくはそれを学んで初めの一歩を今日から踏み出そうと思いました。

イ 書く活動の工夫

中心発問で琴づくりにぼつとうした藤田さんの思いをワークシートに書かせることにより、児童はじっくりと考えることができた。また、教師は机間指導による見取りをその後のクラストークの意図的指名に生かすことができた。

ウ 琴の写真や琴づくりの工程の図の提示

授業では導入で琴づくりの工程の図を提示した。そのことにより、児童は琴づくりの工程の多さや専門性の高さなどについての理解ができ、スムーズに資料に入っていくことができた。

エ 視聴覚教材の活用

終末で琴の演奏のビデオを見せた。ただひたすら美しい音色を求めて琴づくりに励んだ藤田さんの思いと琴の音色がオーバーラップしたことにより、児童の感性に一層訴えることができ、余韻をもって終えることができた。

(4) 各教科等(体験活動を含む)との関連

総合的な学習の時間において、高学年では、自分の生き方についての学習を進める。その時に、より高い目標を立てながら希望と勇気をもってくじけず努力するという道徳的価値を感じさせながら進めていくと効果的である。

学校行事において、運動会、音楽発表会、マラソン大会など、自分の目標を目指して粘り強く取り組む場面は少なくない。そうした学校行事と道徳の時間の指導のねらいが同じ方向をもつとき、学習の時期を考慮したり、相互の関連を図ったりして指導を進めると、効果を一層高めることができる。その際、資料を通して学んだ道徳的価値とを照らし合わせながら、粘り強くがんばっている児童の姿を評価することにより、そのよさを実感させていきたい。それによって、児童は自分の努力の意味を知り、さらに自覚をもって取り組めると考える。

学級活動において、日常生活で児童が目標をもって取り組む場面がある。例えば学期の目標や月目標など、少し長い期間で行う場合である。その際、取組中にこの授業を行い、高い目標を掲げ、自分の理想とする姿に向かって粘り強くがんばるよさに気付かせ、さらに意欲を高めていけると考える。

(5) 心のノートの活用

授業の終末に、「心のノート」PP.16-17の「夢に届くまでのステップがある」のページを読むことにより、授業で学んだ道徳的価値を温めることができる。そして、事後指導として「わたしがえがくこんな夢」の欄に記述することで、本時に温めた道徳的価値をもとに気持ちを高めながら夢について考えさせることができる。

また、「心のノート」PP.18-19「目標に向かう道にはいろいろなことがある」のページを授業後に継続して活用することができる。学級活動や総合的な学習の時間等で、「わたしが学びたい人物」や「わたしの夢」を記述させ、その実現に向けて歩んでいく取組を行うことができる。また、学校で継続した取組が難しい場合は、定期的に振り返る時間を設定し、その時の自分の努力のよさや状況を振り返らせることで意欲を高めていけると考える。

さらに、視覚的に道徳的価値を意識付ける方法として、「目標に向かう道にはいろいろなことがある」のページの挿絵を教室に掲示する。活用方法としては、個人のネームプレートを作成して、目標までの道の上に置かせる。そして今の自分はこの道のどのあたりにいるのかを、ネームプレートを適時動かすことによって日常的に振り返られるようにする。児童は、自分が目標に近づいたり遠のいたりすることが、ネームプレートの位置を見ることによって明らかになり、継続して道徳的価値を意識していけると考える。

